

## 小児がん治療において化学療法を施行された患児の実態調査

○角田陽子, 吉田衣里, 森川優子\*, 森本節代, 吉田翔\*, 松三友紀, 高島由紀子, 平野慶子\*,  
仲周平\*, 稲葉裕明, 仲野道代

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 小児歯科学分野

\*岡山大学病院 小児歯科

### 【目的】

小児の白血病や悪性リンパ腫などの悪性腫瘍に対する治療の一環として化学療法が挙げられる。化学療法の合併症の1つに口腔粘膜疾患があり、口内炎は局所的な痛みを呈するのみでなく、摂食、薬の内服、開口など日常生活に悪影響を及ぼすため、当科では小児科と連携し口腔ケアを行っている。今回、岡山大学病院小児科で化学療法を施行された患児のうち、平成25年7月から平成29年5月までに当科を受診した58人について実態調査を行ったのでこれを報告する。

### 【対象と方法】

平成25年7月から平成29年5月に小児歯科を初めて受診した化学療法中の0~18歳の患者58名(男35名、女23名)を対象に、調査を行った。

### 【結果】

小児歯科へ紹介された患者の初診時平均年齢は、9歳9か月(中央値:9歳10か月)であった。主病名は、血液腫瘍が45名であり、全体の約80%であった。そのうち急性リンパ性白血病が最も多く、続いて骨髄異形成症候群、急性骨髄性白血病、および再生不良性貧血であった。固形腫瘍が約20%であり、横紋筋肉腫が最も多かった。主訴内容は、「術前のスクリーニング」が25名と最も多く、次いで「口腔ケア希望」が20名、「齶蝕」、「交換期障害」、「粘膜障害」がそれぞれ5名、3名、2名であった。また、口腔粘膜疾患については、化学療法中に口腔粘膜炎の粘膜の紅斑の症状が出現したのは14名、斑状の潰瘍・偽膜の症状が出現したのは8名、融解した潰瘍・偽膜・易出血性の症状が出現したのは3名で、症状が出現しなかったのは33名であった。

### 【考察】

紹介患者のうち、約半数の患者に口腔粘膜疾患の症状が出現している。主な主訴内容は、「スクリーニング」や「口腔ケア」であり、化学療法施行中の患児にとって、口腔内の状況は、感染の予防の観点からも治療を左右する重要な因子であるとの認識が広まっていると考えられる。このことから、岡山大学病院において小児のみならず成人を含め口腔ケアの重要性について周知し歯科受診を促すことが必要であると思われる。